

209) 清水

若かりし頃、我輩は昆虫採集に夢中になっていたことがありました。昆虫といっても我輩の場合は、蝶を集めるのがほとんどだったのですが、遠く北海道から九州まで蝶を求めて旅をしたのであります。これは蔵王山麓の遠刈田(トカッタ)というところでの真夏のお話であります。

林の中の急な坂道を上って汗だくになっていると、小さな沢がありまして、小生は恵みの清水とばかり、このセセラギに手を入れると、ひんやりとしていて、これなら飲んでも大丈夫と、リュックを下ろして水筒を取り出すと、少し残った生温くなった水を捨てて、この水に入れ替えたのであります。そしてついでに手で水を掬うと腹いっぱい水を飲んで、次の水場まで備えることといたしやした。ところがその時、水の中で何か動くものを見つけました。オヤ何だろう。こんな水の中だからイワナか何かの清流魚だろうか。小生は目を凝らしてよく見るとどうも泳ぎ方が、魚らしくないのであります。ハテ？何だろう。オヤ山椒魚かな、足がついてるぞ！捕虫網の柄の先でつついて見ると、腹が赤いではないですか。何とこれはイモリだったのであります。イモリのすむ水をはがぶがぶと飲んでしまって、吐き出したくても吐き出すこともできず、薄気味悪い思いをしながら少し上まで上って行くと、何とそこには広々と田圃が広がっていて、せせらぎと思っただのは単なる田圃から流れ出た水だったのでありやした。以来我輩はイモリもタモリも大嫌いになったのであります。